科学ジャーナリズムの世界：真実に迫り、明日をひらく

編　者：日本科学技術ジャーナリスト会議　　頁　数：319p.
出版者：化学同人　　価　格：本体2,400円＋税
出版年：2004年　　ISBN：4759809740

本書は，日本科学技術ジャーナリスト会議発足10周年を記念して発行された，科学ジャーナリストのためのガイドブックであるが，のみならず，われわれ医学図書館員にとっても興味深い内容であった。

ジャーナリズム・ジャーナリストという言葉は，世界を飛び回り，危険を顧みず現場の真実（様子）をいち早く伝達する活動・人というイメージを持つ。だが，科学ジャーナリズム・ジャーナリストとは何かと問われると，返答に困る人も多いのではないだろうか。本書は，新聞・テレビ・雑誌・インターネット等の様々なメディアで活躍中である（かつて活躍されていた）科学ジャーナリストの方々が，科学ジャーナリズムの現場で感じている率直な意見とともに，将来の科学ジャーナリズムに対する熱い想いを語っている。

本書で言うところの「科学」とは，物理学・生物学・化学・天文学・植物学等であり，日本十進分類法で表現するならば，ほぼ類目表（第一次区分表）4：自然科学にあたると考えてよいであろう。もちろん医学もその範疇に入っている。

第2章で，読売新聞の科学部記者である保坂直紀氏は，「科学は市民にうまく伝えられているか」と題し，科学・技術に関心が薄い日本人に対し，新聞で科学を伝えることの難しさや，科学を読者に十分伝えられる日がくるためには，社会として何をしなければならないのかを述べている。日本人の科学に対する関心は，やはり年々薄れている感が否めない。保坂氏はそんな読者を責めていないが，科学の発展に伴う弊害を考える時，我々日本人は，やはりもう少し科学に目を向けることが必要ではないだろうか。

第13章で，毎日新聞社の科学環境部長である瀬川至朗氏は，「医学・医療ジャーナリズムに求められる視点」と題し，医学ジャーナリストは，生殖補助医療や脳死・臓器移植などの生命倫理に係る問題をどのように国民に情報提供しなければならないか，また新しい医療技術について，ときに警告を発することをためらってはいけないと述べている。また，第15章でも，北國総合研究所主任研究員兼北國新聞論説委員である井上正男氏が薬害エイズ裁判に触れ，瀬川氏同様，今後起こり得る結果の的確な予見性，根拠を示してその予見内容を社会に警告していくことが，今求められている科学ジャーナリスト像であると述べている。警告を発するということは決して容易でなく勇気の要ることであるが，あまり科学に興味を持たない日本人にとって，科学ジャーナリスト側からの警告は，今一番必要とされていることなのかもしれない。

7部から構成されている本書は，それぞれの部の最後にコラム（まるでCoffee Breakのような存在）があり，科学ジャーナリストの経験談などが掲載されている。長辻象平氏は「スパイ・売人・越境者」と題し，海外での科学取材中に起こった体験を語っている。このコラムを執筆しているということは，無事生きて帰ってきていることを意味しているが，なんと危険な仕事であることか。

様々なメディアの科学ジャーナリストが執筆しているだけに，内容に広がりがあり，飽く事無く読み終えることができた。さすがはジャーナリスト集団が執筆したものであると感銘するとともに，ぜひ医学情報を扱う医学図書館員にも一読していただきたい。

（朝日大学図書館　香田友美恵）